畫圖西遊譚

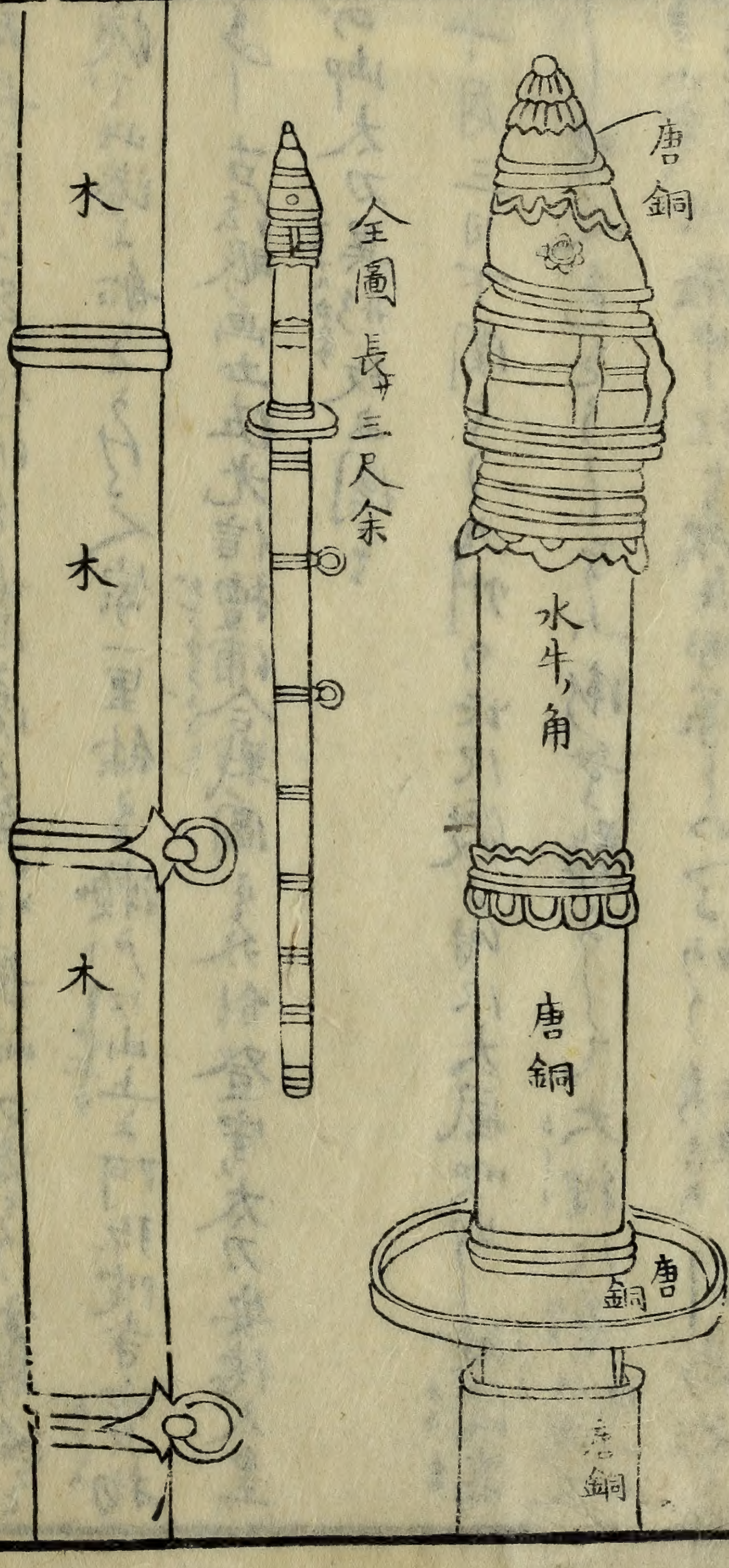
參

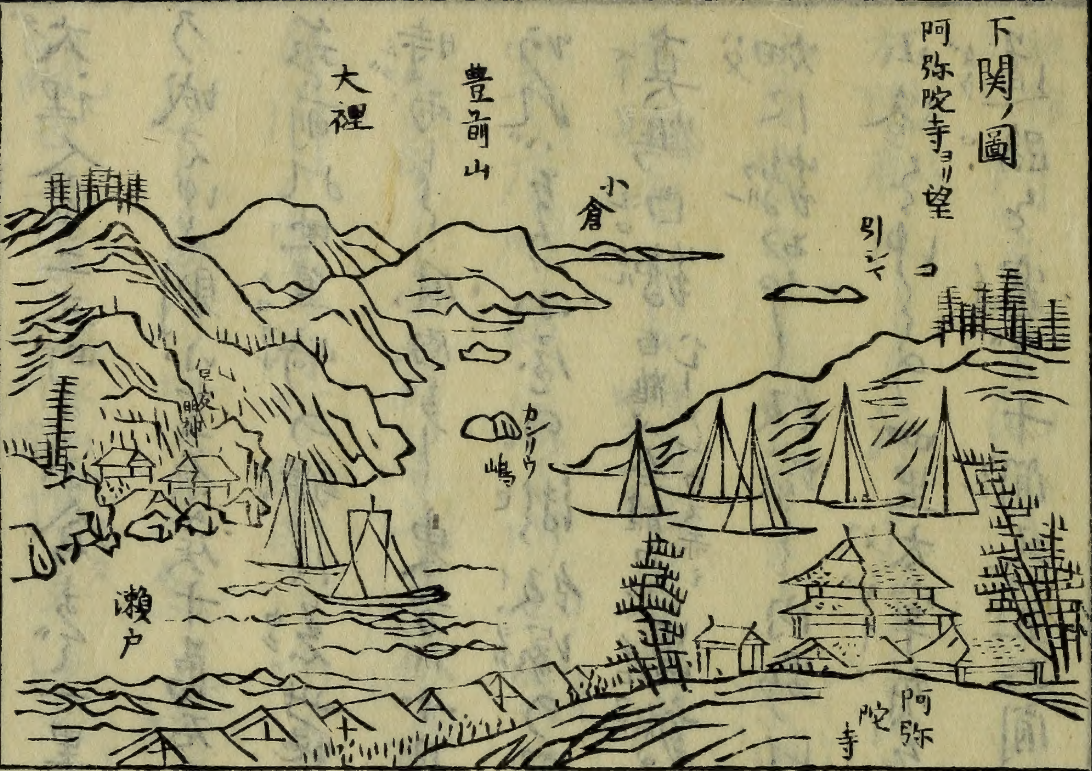
西遊旅譚巻之三

扨長府を出て檀浦(ダンノウラ)より赤間ケ関に至(下ノ関)長崎の方より玄界灘(ゲンカイナダ)を渡り此港に船をつける人家一里余る瀬戸口山上に阿弥陀寺宝物(ホウモツ)多し古法眼画土佐光信檀浦合戦(ダンノウラガツセン)図平氏能登守太刀安徳天皇の御太刀異形(コトナルカタチ)故此図を出

十月三日下関より九州の地に渡る時に大風吹出し波濤(ハタウ)高し諸人色をうしなふ漸難をのがれて大裡(ダイリ)に着(此渡大裡へ一里半小倉へ三里なり)此海中に与次兵衛塚といへるありて秀吉乃船頭ナリ引島(ヒコ)又田ノ首(クビ)しも云 平家の一門引退きしる島なり

安德天皇御太刀之圖




下関ノ圖
阿弥陀寺ヨリ望ム
引シマ
小倉
豊前山
大裡
カンリウ嶋
瀬戸
阿弥陀寺


下関を船より眺
長州山
カンリウ島
与治兵衛塚

大裡人家二三町ありて小倉まで一里半初めて海を左の方に見る小倉の城見ゆる則小笠原侯十萬石の城下にて市街縦横ありて夫より筑前の地黒崎の驛に至る此地より長崎の方ハ冬月より春まで時雨多く風雨多し東方ハ十月の小六月にて東西風土に違ひければなり小屋の瀬飯塚の間五里ばかり田邊川邊に鶴多し真鶴白鶴（白鶴ハ全體白くハシトアシウス赤し）黒鶴（小ニシテ黒ク頭赤し）筑前の地總じて平野田畑に鶴多し飯塚より内野ハ宿右の方に入田畑をすぎて山路をゆくこと四里太宰府なり此路甚だ山中にして大石道路を塞ぎ十間又ハ五六間なるもありて天満宮大鳥居

旅館多シ門を入て池あり橋三ツかゝる 過現未ノ三橋ト云 山門をくゞりて本社左

右廻廊(クハイラウ)にして神さびたる地なり池乃辺(ヘン)大楠多し毎年

八月廿一日より廿六日まで祭禮(サイレイ/マツリ)近郷より参詣多し 天原山

安樂寺と云 寺ニアラズ地名ナリ 岩踏川社乃北の方三里ニ在 思(ノ)川

宰府町西へ流るゝ川也 愛(イ)染川社の南にあり 哥に

名にすかう又ぬるゝをへま袂あり かひくゞる川の末乃むすびのあみ

白川ハ宰府町西南にあり 哥に

むかしみのワの里数ハ忘川乃しらかはむかしを春るかな

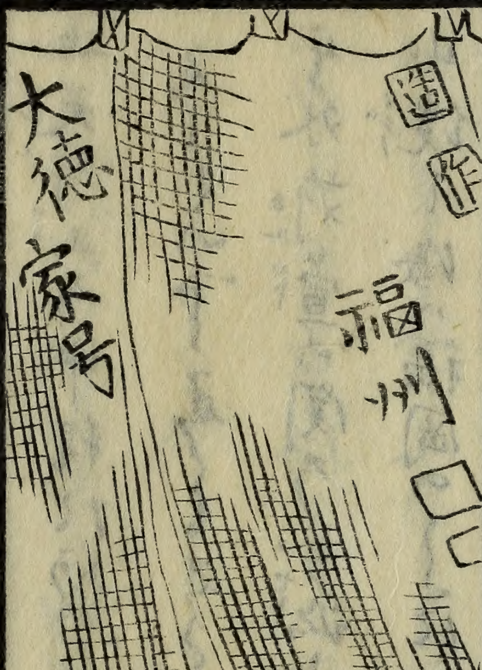
観世音寺 清水山普門院 博多(ハカタ)へゆく路(ミチ)なり 博多へ四里 戒壇(カイダン)院観世音寺

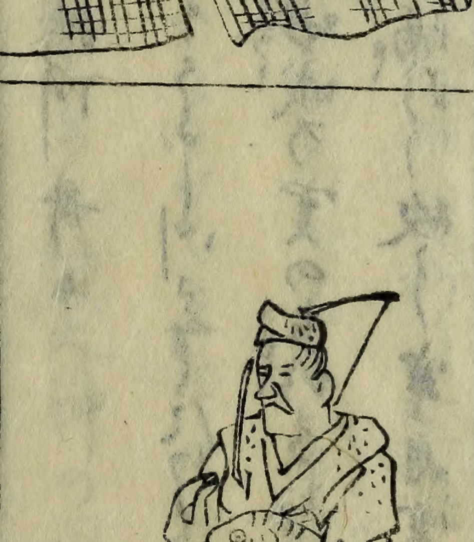
らく近し都府樓の跡也又安徳天皇の殿のありし所も先年此寺本堂の下より瓦二枚を堀出しぬ生焼にして赤色伊部やきのごとし古人の物なりし是都府の古瓦なり菅丞相の詩にも纔見瓦色此寺より六七町をへて田の中に礎あり方五六尺央より丸柱の象あり總て此邊缺瓦多し表に志るしなどあり裏布目あり陸奥多賀城の瓦のごとし二日市針すりの嶺まで見ゆる幸橋の跡あり多ぬまとなりてとふ人もゆけと先年ほとしとぞいひし四方寺山髙橋沼運ら城跡あり天拜天神の祠ハ温泉町の

上天拜山の中程にいたり漆川哥母

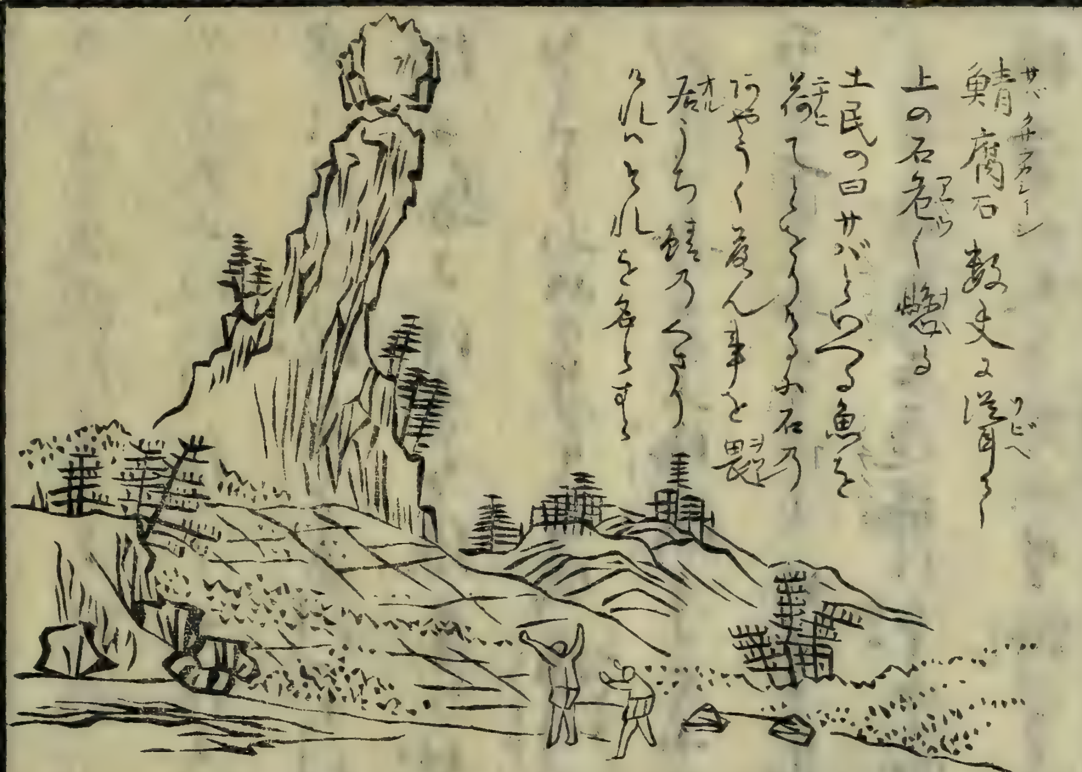
なかめ以下を見てもおそろしきまでにいる人ハめまひそう
外苅萱の関乃古跡水城乃ぐいの古跡を擬手府ハ四面
山繞て海ハ福岡のうしろに隔りし故り寒月雪深しといふ
夫より原田へ出て田代ハ中筑後乃高良山ハ中
原より若山ハ道ハ是より十六里又久留米の城見ゆる
有馬侯の城下中春より神崎の宿にて喜鵲多し此所より高麗
烏とてまた此辺に宗麺をも作る作賀鍋島侯の城下城下
町二里餘人家積多り富商おほく婦人乃容貌の風

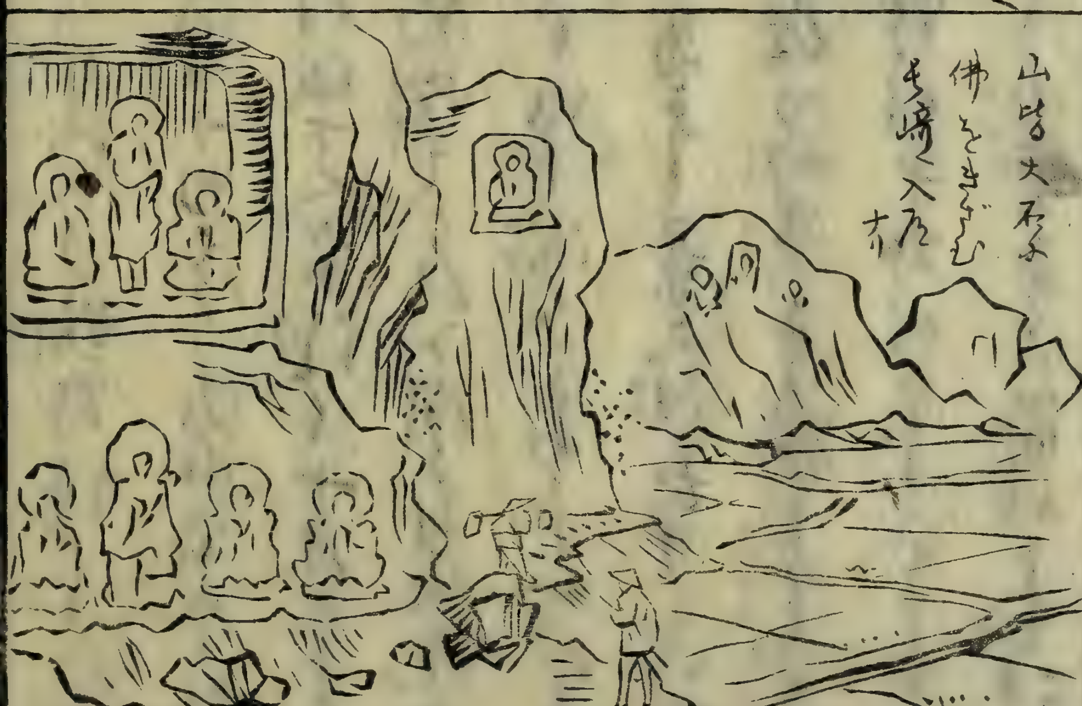
江戸より境原まてハ銭一文を一まい二文を二枚
とよぶ言語とうらず異なり此邊過てハ石乃多びにて
てる中春ハ寒月雪を積む事二三尺小田にて此邊
農人の家ごとに暖簾をかけるに麁布にて此邊の
支那より荷物を包来る莚なり圖の如し





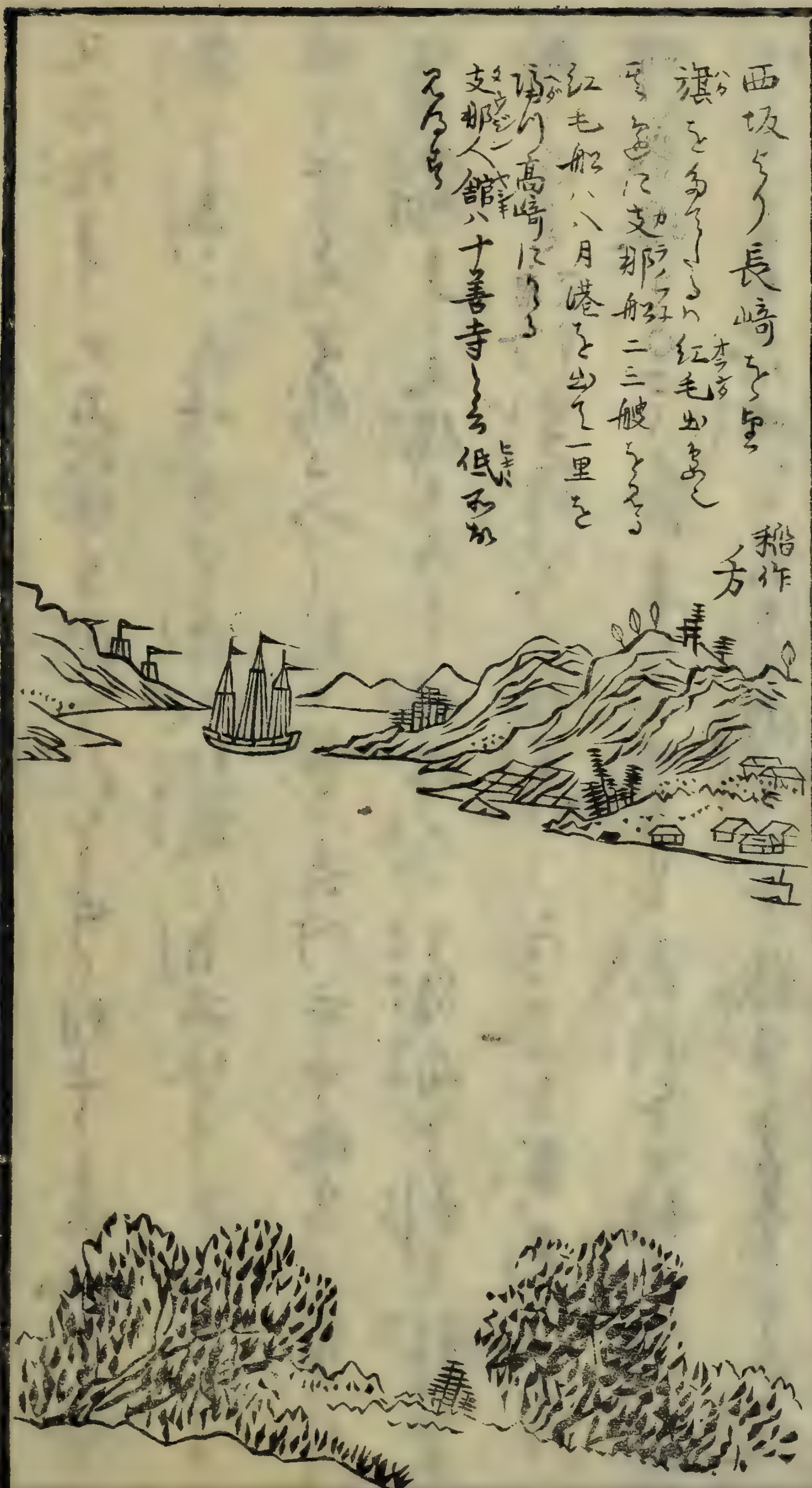
夫より成瀬にいたる又塚崎へ行路より嬉野茶ヲ出スより行こと二六
此有大山坂より移りて大村にいたる十町ばかり右家中路の
半は桜など植置たれば大村城下人家続く十月九日市
街戸毎に注連を張香を焚餝てられし聞ば此地砲瘡
をきらふ此国の風流なりとぞ是を除んがためとて町中にて
れより舟にて海湾すぎて小島多し景又佳長井といへる
所まで十里舟より行のぼり時津にいたる大村ノ領地是より我
への黒鯖腐名道端に出中野村平野村などゆくほどに其の
路常の犬をみれば皆狆なり小童多く筒袖をきて唐人風


鯖腐石(サバクサレイシ) 数丈ニ聳(ソビヘ)て
上の石危(アヤウ)く嶮る
土民の曰サバうりける魚を
荷(ニナ)ひてしばらく此石乃
下にやすらく覆ん事を畏(ヲソ)れ
居(オル)うち鯖乃くさり
それハこれを名とする


山皆大石ニ
仏をきざむ
も崎入江
ナリ

又石階(サカ)多し大石に佛を刻(キザム)したるもの村上にあり胡羊(ヤギ)豚(ブタ)雞(ニハトリ)を畜(ヤシナヒ)長崎市中唐人(タウジン)和蘭(ヲランダ)に售(アキナ)ふ西坂より長崎をみる坂より下るもの甚多く入し数を留(トヾ)る長崎市中海岸の家に作(ツク)る故に石階(イシサカ)多し又橋(ハシ)も石もて作(ツクル)婦人(フジン)は生涯(セウガイ)眉(マユ)を剃(ソラ)ず指(ユビ)にかねの輪(ワ)をはめ唐人ノ言語(ゲンギョ)はよろし放言(ハウゲン)多し左に一二を載(ノス)兄(ヨ)を○バボウ姉(アネ)或は娘を○ゴヽ人の妻(ツマ)を○ヨカツサン色情(シキジヤウ)を○相思(シヤンス)唐韻なり踏(フミ)壇(ダン)石を○キンバ皿(サラ)を○バセウ遊里(ユウリ)をば散歩(ゲメク)を○ス子フリ番椒(タウガラシ)を○コシヤウ物を與(アタフ)るを○シケンカアジイ手ほどきを○コレシ子餘程(ヨホド)を○ヤツト親父を○チヤンといふ又言(コトバ)の中に○バツテンといふもの多し

其外(ソノホカ)殊の外あたゝかにて風土暖(アタヽカ)にして寒月雪なくして園中に橙(ダイ〳〵)を植(ウユル)酢(ス)ニ用ユ琉球芋(リウキウノイモ)多(オホ)し赤白二品有赤蕪(アカカブラ)あり大根ハ短(ミジカ)しケラノ尾といふ




山川田畑を

支那人館ハ十善寺と云ふ寺ニアラズ地名なり中に社稷を祭又関帝堂あり帝命を奉て渡海する者古ハ四氏中ハ王氏今ハ銭氏の人来る也都十二家なり是ハ自分一己の交易に渡海を請ふ蘇州の人也則蘇州ハ日本ならバ大坂のやうなる地なりしかし南京第一乃繁栄の所なり今ハ七八艘の渡海して十二艘とまうし程赤城といへるもの浙江のうち乍浦といふ所の人にして十五年以前より長崎へ来る又方西園と云者ハ画を好みハ九年以前より渡海す福建の人なり又孫周仁禄宋敬庭の類数年渡海して

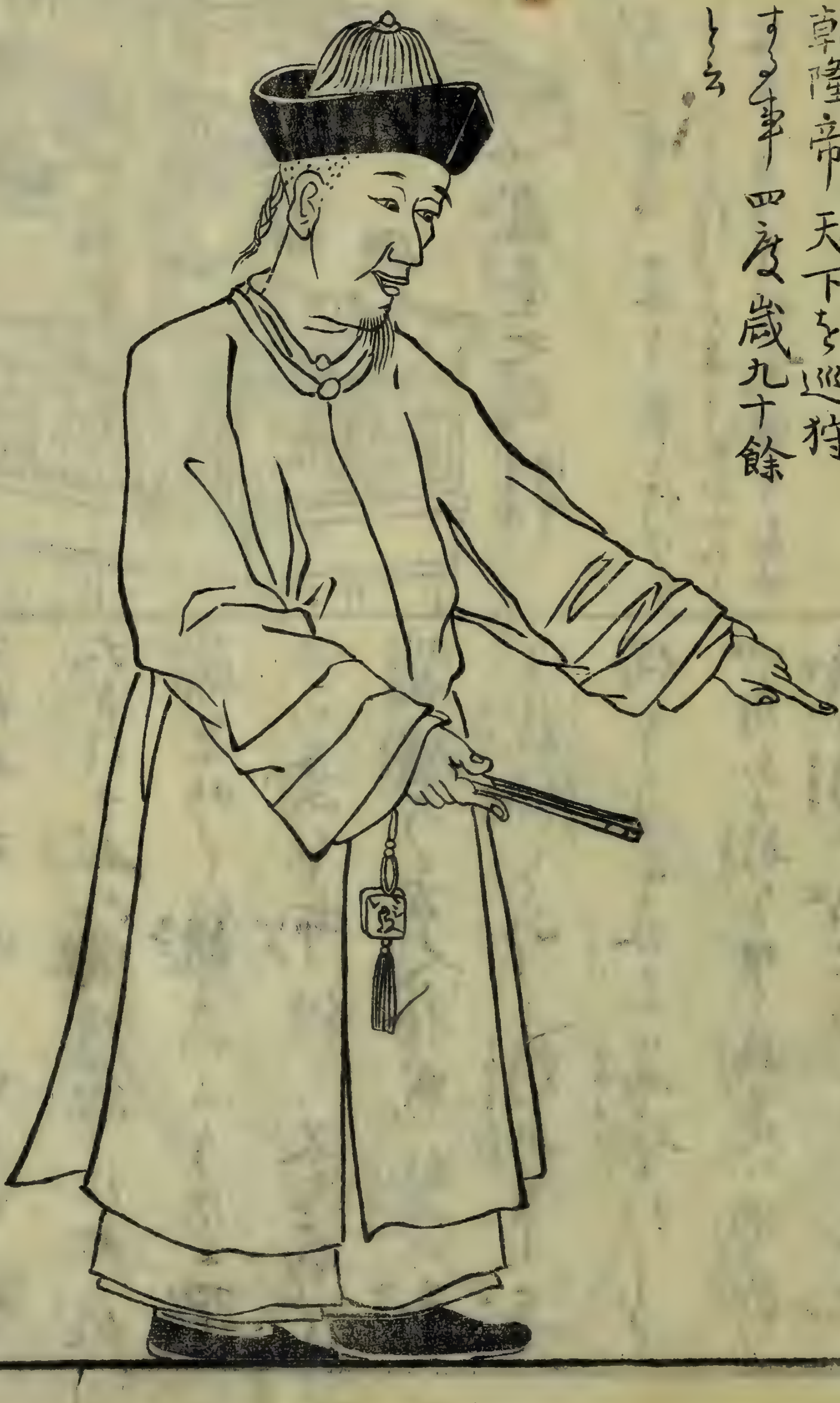
少しくも書畫を作さゞるもあらずといふべし
草亭撲庵宕山可亭皆書をよくし伊孚九山水の画
あり皆此れ商賈にして交易の餘暇此技あり日本に
商家ともに哥俳諧書画を学ぶもの多し是に比すべし
能画能書或文雅を賞するたぐひまたあらん沈南蘋一人
能書よして画師なり又近年來舶する方西園ハ交易に
疎ければ画をよくする多くハ水墨にて着色なし其師也
とする者周西山名ハ選此一人ハ北京の産にして遊歴して南
京より渡りし頃長崎へ来る此者一人ハ文雅の者にて能書畫

そともに一日を過し帰帆も官を避るもありぬ南京寺或は悟真寺にし度々應對して書畫をも見る又此方よりも画など贈る總て支那人は日本人にかはる事なし志をもつる似たり雅も俗もかはり又顔面日本人のごとし只衣裳のちがひあるのみなり

支那人之圖

明亡今は清の代となる乾隆五十三年也風俗如圖頭ハメグリヲ剃テ中ニ髮ヲ置





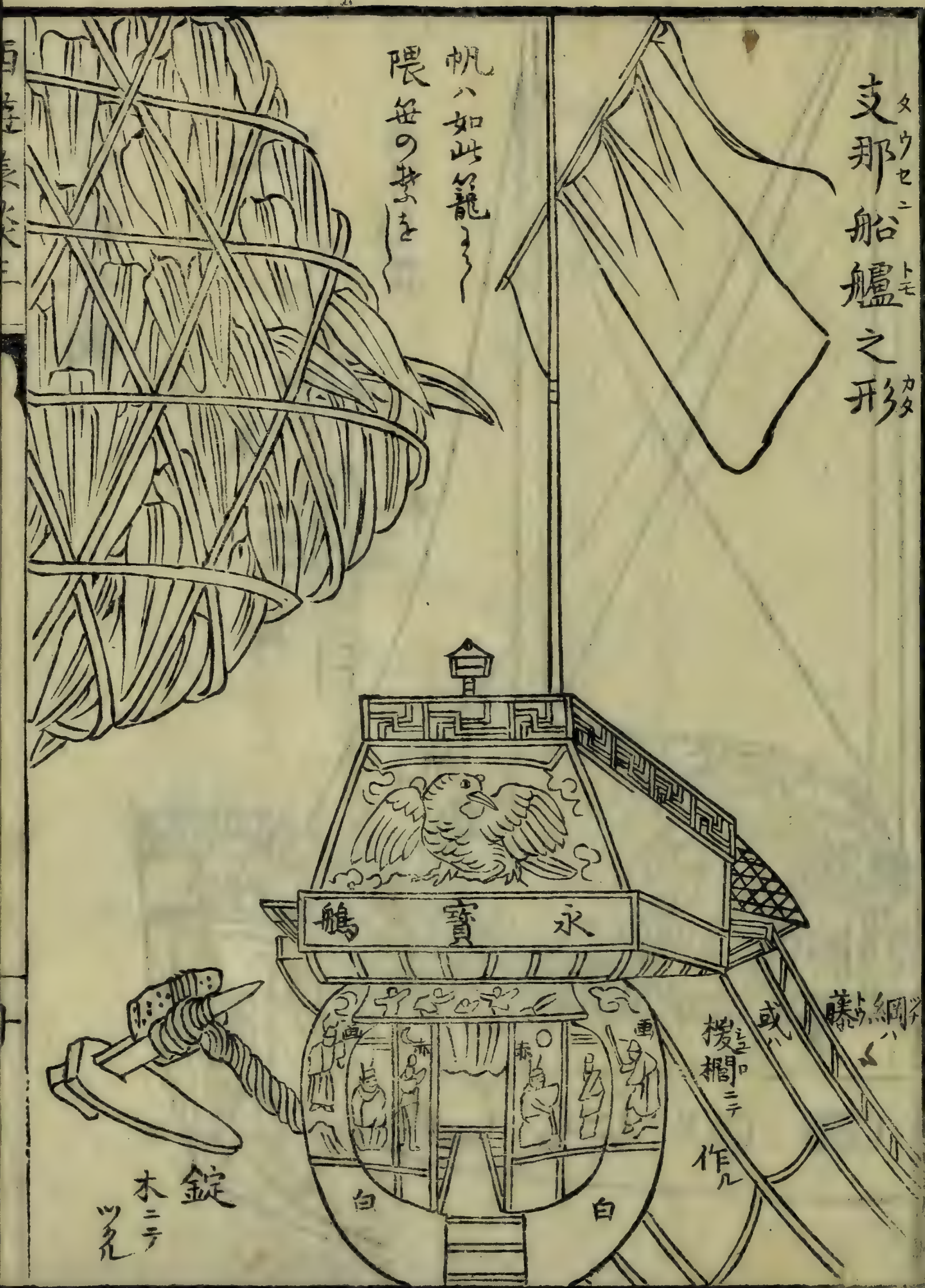
乾隆（ケンリウ）帝（テイ）天下を巡狩（ジユンシユウ）する事四度歳九十餘といふ

支那人居宅ハ日本よりも家を作りわけ
なれども作りやうなし日本のごとく
客あつまる時ハ毛氈を敷也

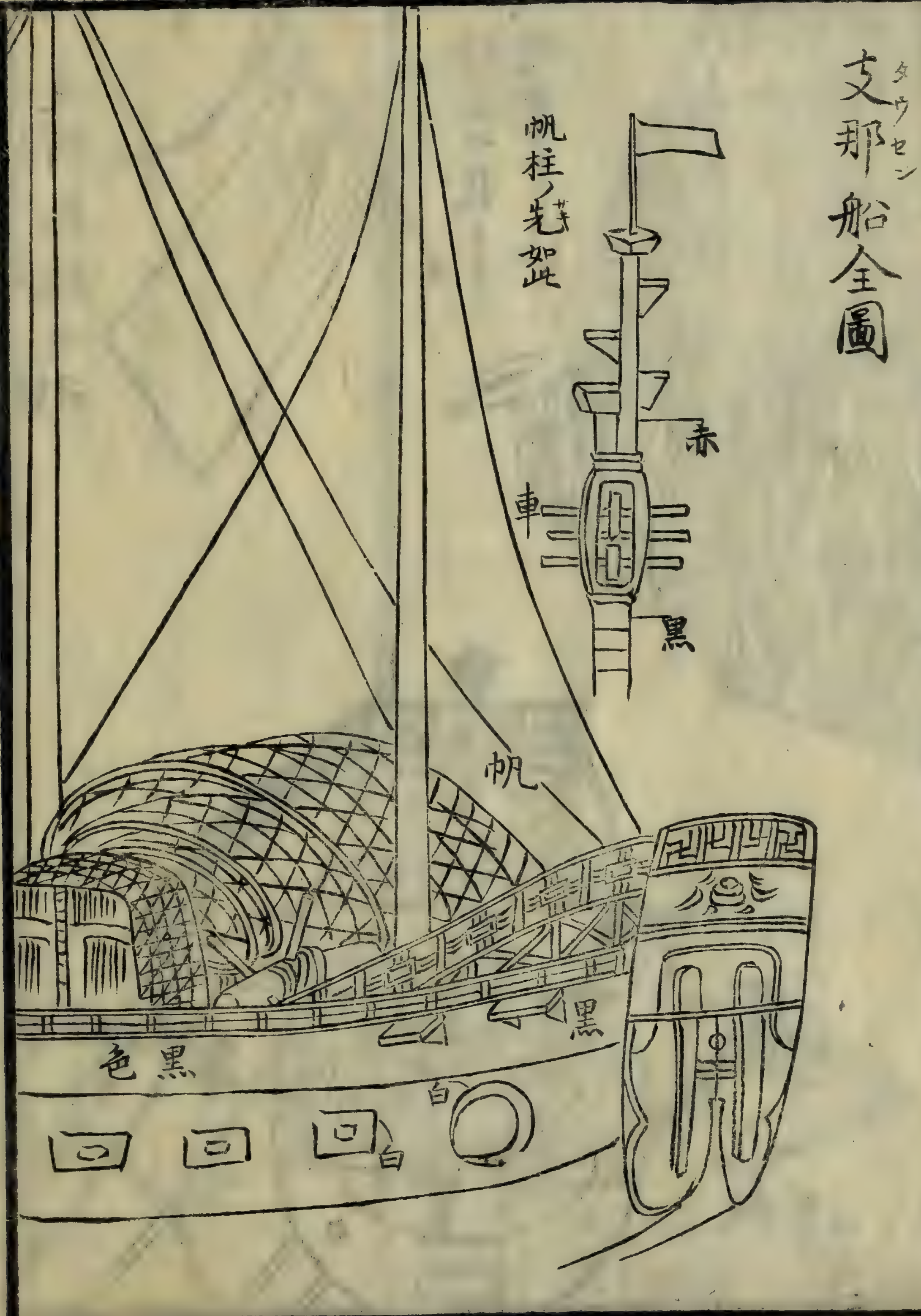


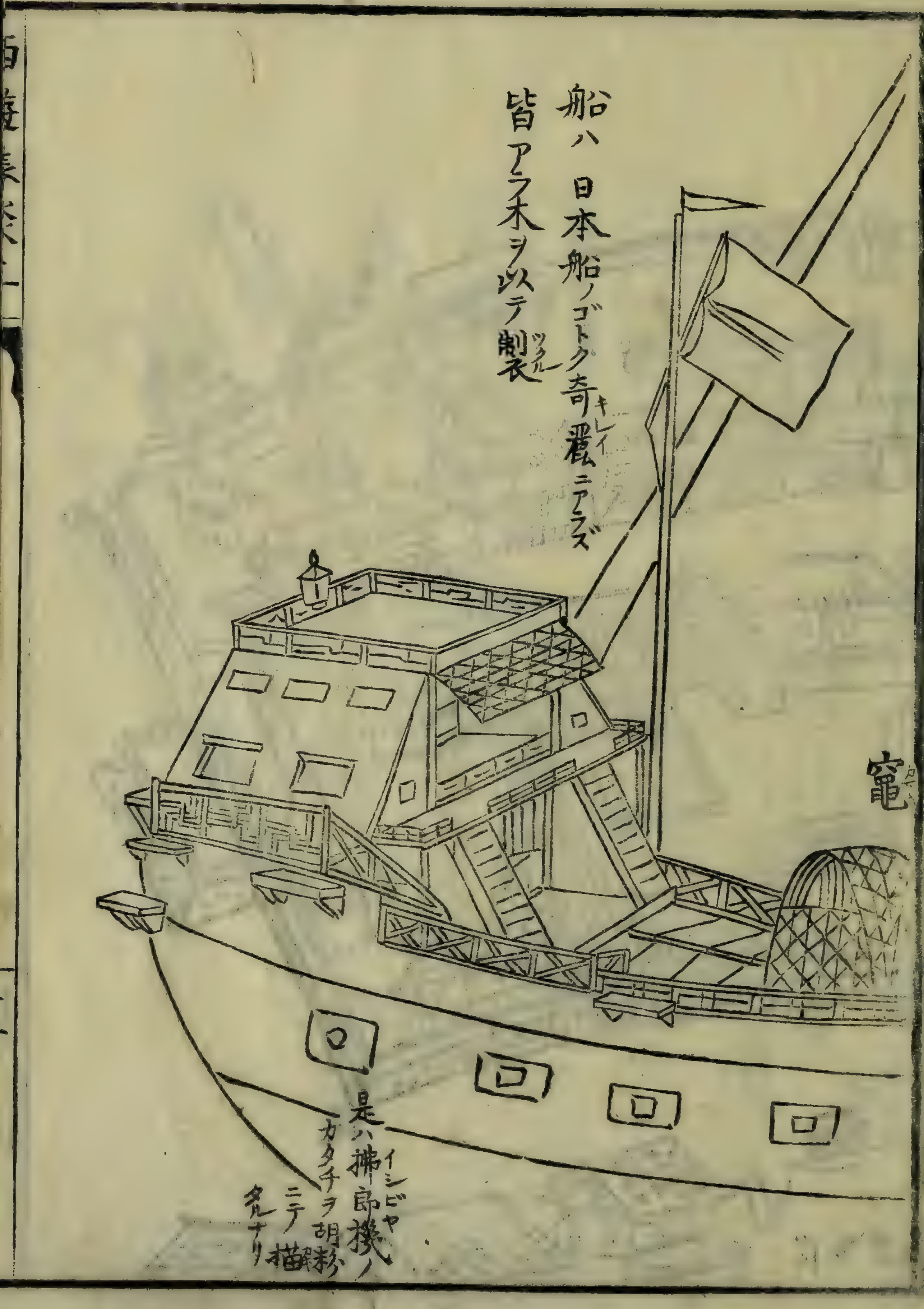
露臺之圖 夏月涼所也

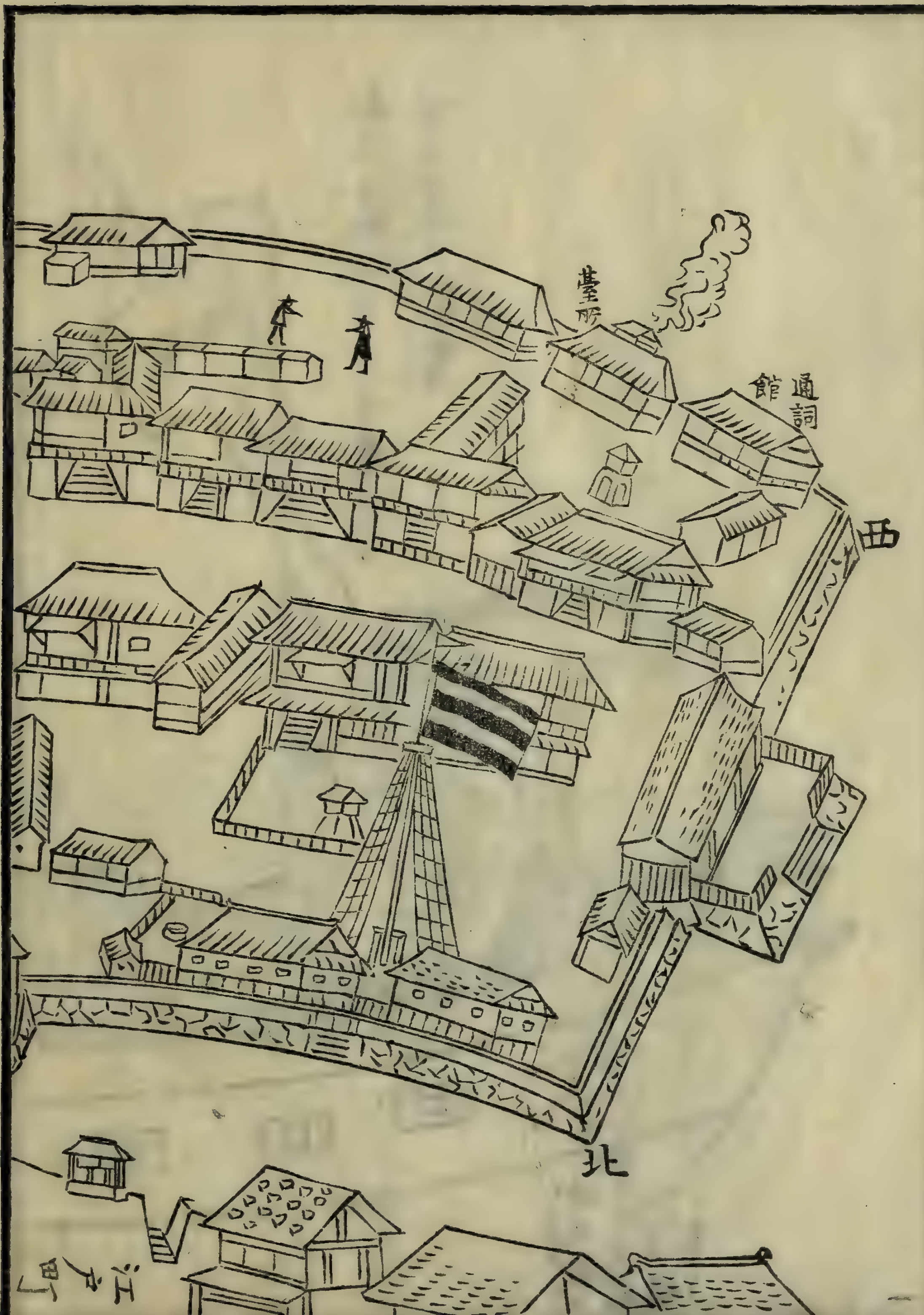
支那船ハ梅ケ崎より来り居る船の
大きさ十五六間帆ハ布にあらず
藤をもつて籠につくり内に隈
笹の葉を布き錠にて木をもつて
製す艫乃方人物或ハ鷲の類
を粉緑をもつて彩画甚
俗なり其外も黒塗にして
四角なる形を白く画く是ハ彿郎
機の形を画にかきしるものなり

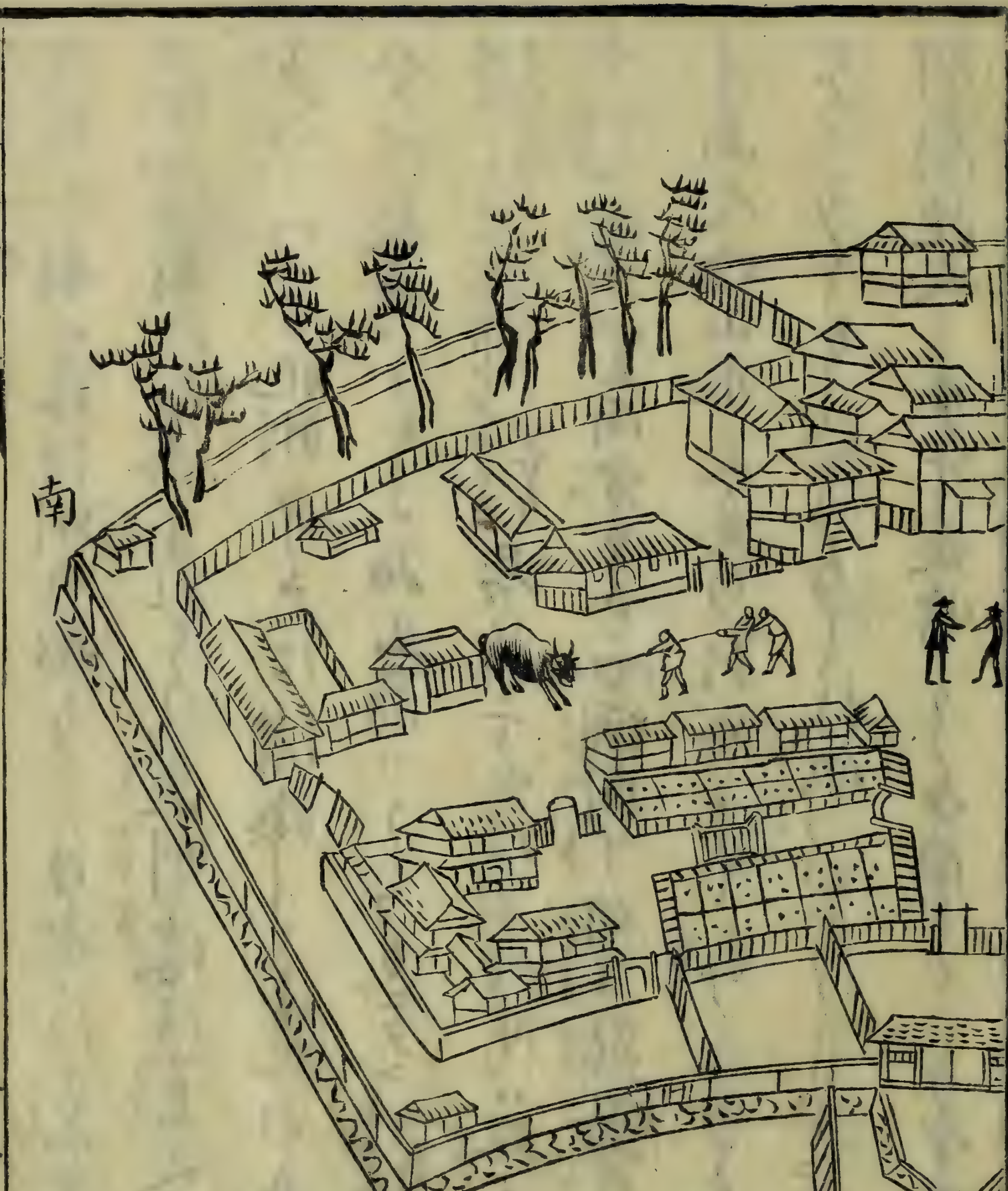

支那船艫之形
帆ハ如此竹籠
隈毎の葉を
永寶艍
赤
赤
白
白
綱ハ藤或ハ棕櫚ニテ作ル
錠
木ニテ作ル

支那船全圖




船ハ日本船ノゴトク奇麗ニアラズ
皆アラ木ヲ以テ製
竈
是ハ拂郎機ノカタチヲ胡粉ニテ描タルナリ


臺所
通詞館
西
北
江戸町


南
東

支那(カラ)和蘭(ヲランダ)其外諸州の船を　日本に着(ツケル)ことハ
伊勢(イセノ)國の大湊をはしめ泉州(センシウ)堺(サカイ)に着(ツケ)又筑前(チクゼン)博多(ハカタ)
多(タ)けれとも肥州平戸に渡海し寛永辛巳の年
今の長崎とある処出島のうちカピタン（カピタンハ日本にて呼伝へる名也）
（彼国にてハヨツプルホウフドと云　其外頭といへることなり）居所二ケ所にて是一ケ所ハ外(ソト)より階子(ハシゴ)に
て昇(ボル)楼(ニカイ)上四五間方(ハウ)なる所欄(ラン)間(マ)下(シタ)硝子(ビイドロ)額(ガク)数十(スジツ)品(ヒン)を掛(カケ)
て書画人物山水花鳥の数々其まゝ動(ウゴ)くかことく又椅(イ)子(ス)
なとうつくしくめくらして飾(カザリ)おかしとなり
阿蘭陀人　日本長崎より本国まて　日本里数(リスウ)にて

一萬三千里ともいひしにそのうちを行バ二千四五百里に過
ず此日本よりハ西に當(アタリ)少しよりある處なれバ寒暑月
ハおほく米を生せざれバパンをつくり或(アルイ)ハ牛肉(キウニク)をもて食(ショク)とする故に印度(インデ)
亜(ヤ)流に船を免がれし交易(カウエキ)をもって第一の國務(コクム)とせる○

崑崙奴(クロンボウ)ハ ジヤガタラハ赤道直下の國

彼國の詞(コトバ)にハスワルトヨンゴーと呼(ヨブ)ジヤガタラの人なり
阿蘭陀人の下奴(ゲヌ)となりて來ることも色黒(セツクロ)なり
外ニ黒乃諸國なり

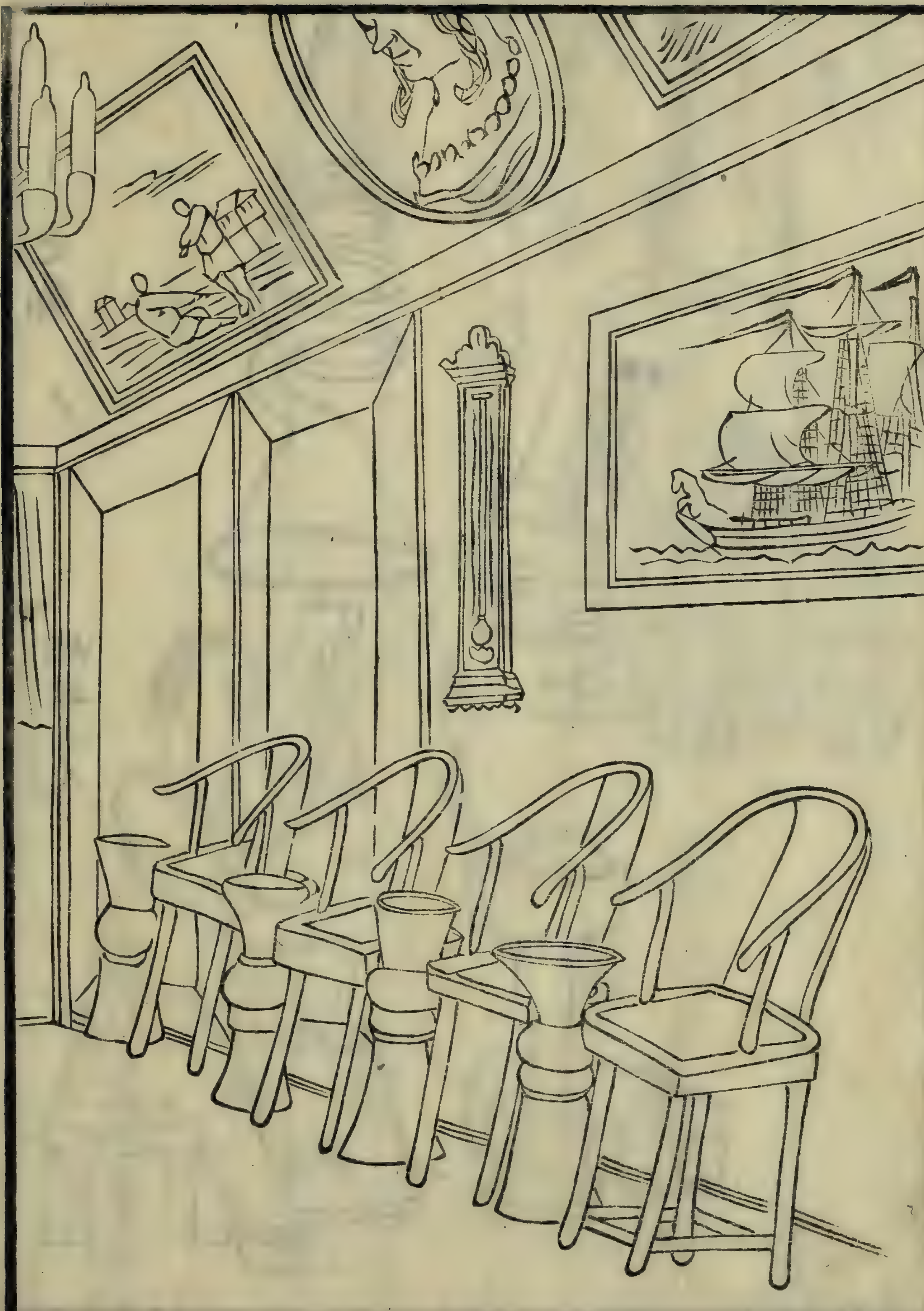
何れといへども墨を以て染(ニシテ)たるが如し又黒(クロ)き衣るもあり夏月ハ躶(ハダカ)にして袈裟(ケサ)のごときものを纏(マトフ)者ありベンガラ縞(ジマ)なり冬月ハ和蘭(ヲランダ)より衣服をかふることなれハ紅毛乃衣服のごとし羅紗(ラシャ)絲布(サラサ)にて作る頭巾(キン)あり世にクロンボウといふもの是なりニタロスといふものの何れも船中乃水主(カコ)となるもの かの甲船の中にてなきものなき水練(スイレン)をよくするものハ（クロンボウに似たる此ニタロスなり）此ものハ阿蘭陀本國乃人にて言語も和蘭の辞(コトバ)なり顔色(ガンショク)ハ白く髪(カミ)ハ茶色目ハ鮮(ヒトミ)赤し十五六歳のもの

散髪(サンハツ)衣服(イフク)阿蘭陀のごとし此マタロス帆ばしらにのぼりて身のかろき事鳥のごとし

和蘭(オランダ)船は大サ四十間表の方獅子を作る総(スベ)てチヤン塗にして黒し艫(トモ)のうしろ家形作(ヤカタヅクリ)内は入口玻瓈(ビイドロ)障子(シヤウジ)前より天幕をはり地毬(チキウ)天毬(テンキウ)をかざり半(ナカバ)に舵(カヂ)を廻(メグ)らす車あり其の左右に水竿(ミヅサホ)をさし帆ばしら三所に建(タツ)てしごまく下り入佛郎機(イシビヤ)二十五左右に向ひて朝暮二度放(ハナ)てなり又十二三もなるの童あり是を仕事(シクジ)になるの事まし彼國風(カノコクフウ)なり　船をとくしくするまるみ安くなえ長崎者の杜撰(ヅサン)なるべきなり　又洋(ヤウ)中より出(イデ)ては

要害(ヨウガイ)になる事もあるべし如くハ穢(ケガレ)を蕩(ザン)じ去る事
なく此國まく火をともして浄(キヨメ)る如し其音山に響(ヒヾキ)く
霹靂(ヘキレキ)のごとし荷物も船の底(ソコ)に積(ツミ)竈(カマド)も下におゐて
烱(ケブリ)をとぢたる所ありて其下に入焔硝(エンシヤウ)を貯(タクハフ)る總(スベ)て船とチヤン
まく塗(ヌリ)る事や生ざらんとするもの寿命(ジユメウ)を減(ゲン)す又燈(トモシビ)し
消火(キヘ)もおこらじ是ハ氣の通(ツウ)せざれバなり故にウヱンドルと云
具(グ)を製(セイ)して氣を通せしむ支那(カラ)の船の粗なると阿蘭
船の精(クハシキ)ハ甚のちがひなり


ウヱントル之圖
焔硝守人
海底に沈しゐるものを取あけん為也

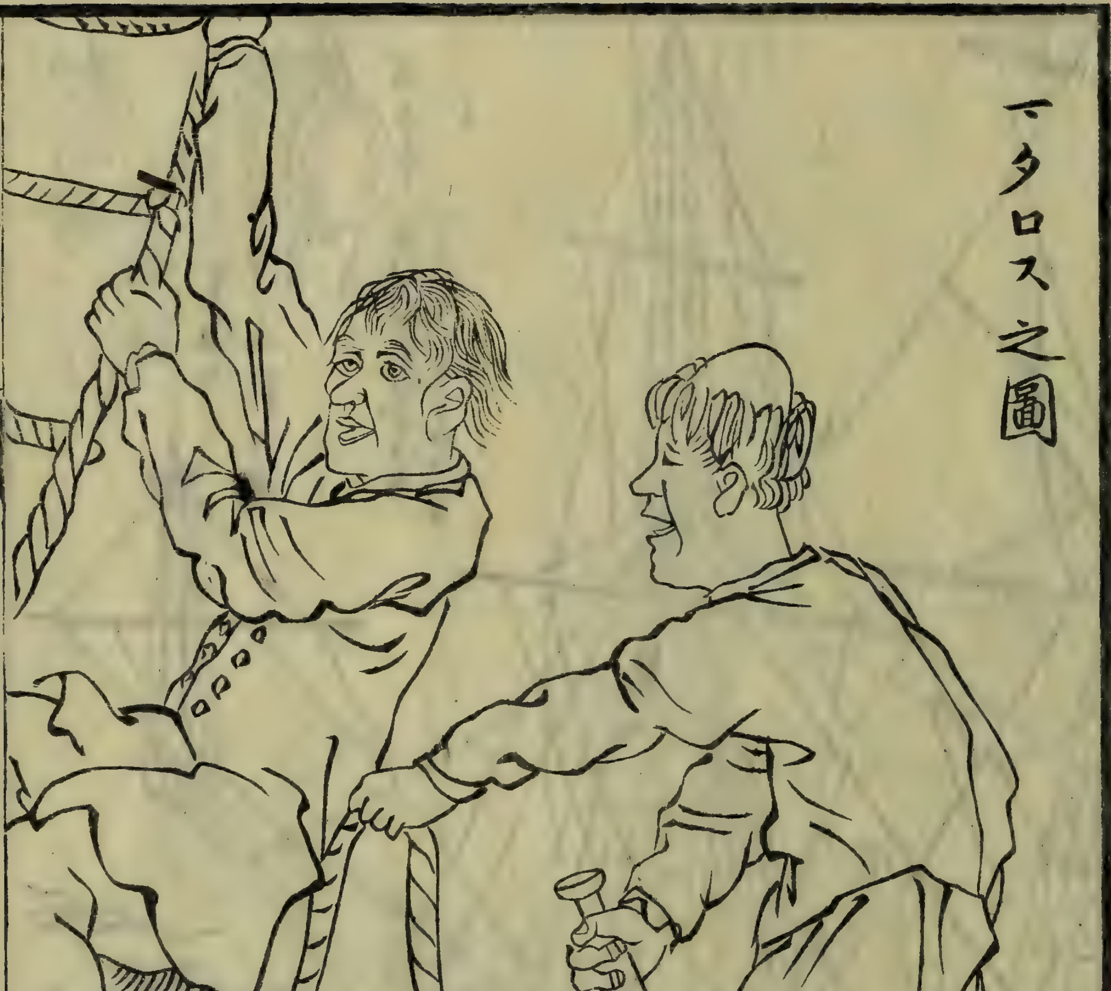



瑠璃燈
Kor

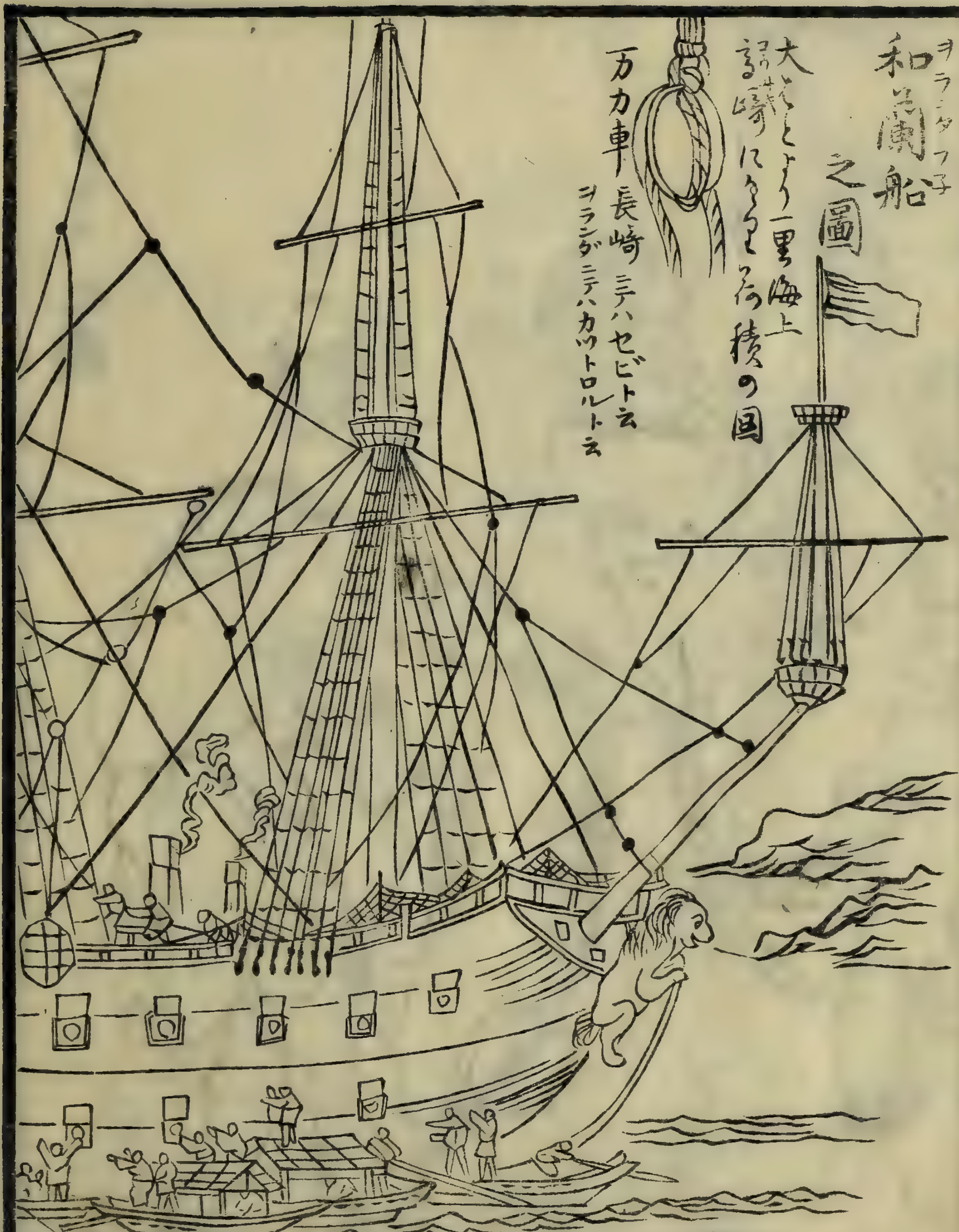


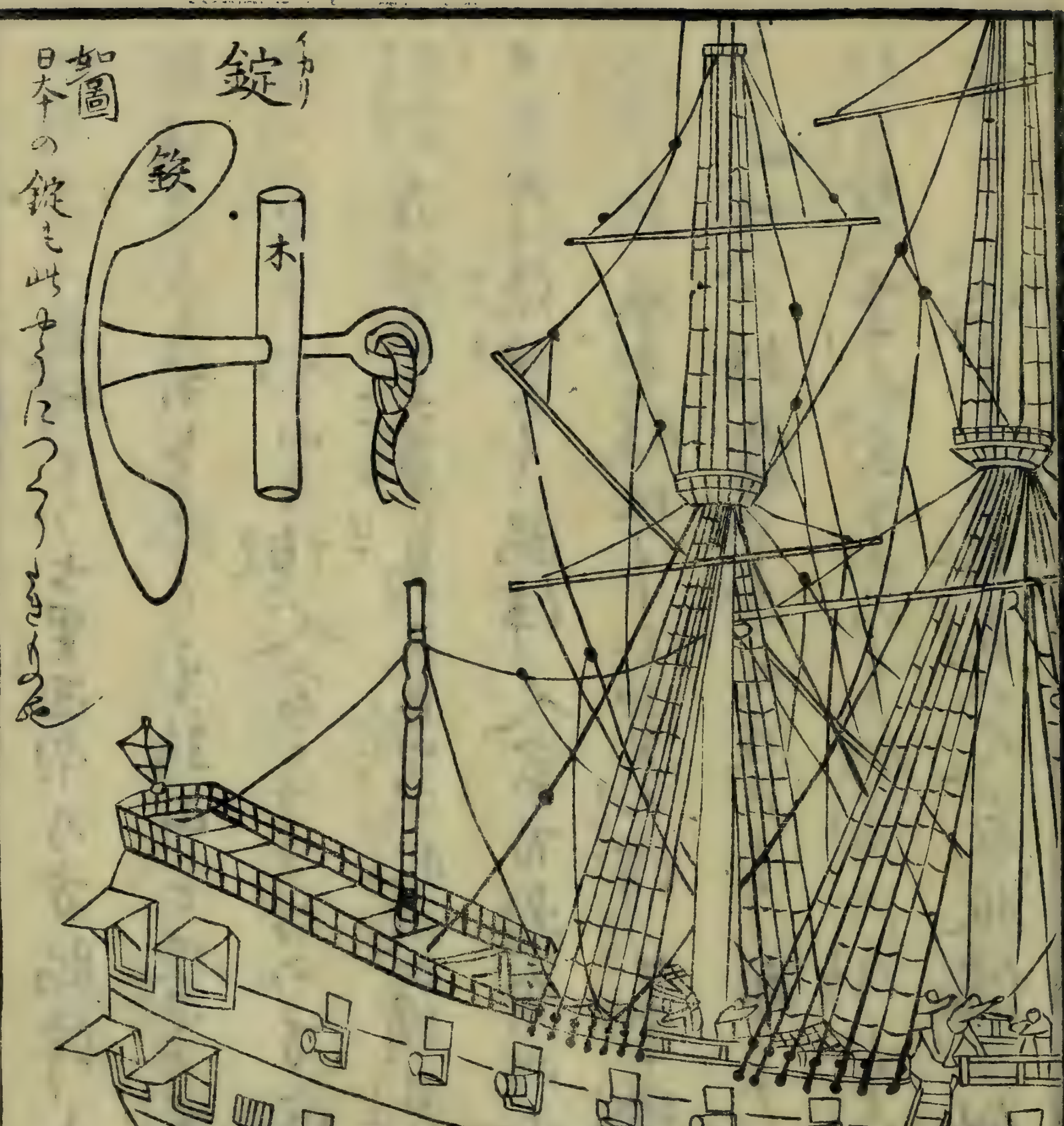
崑崙奴(クロンボウ)スワルトヨンゴ之圖

夏月ハ裸(ハダカ)冬ハ如圖



マタロス之圖

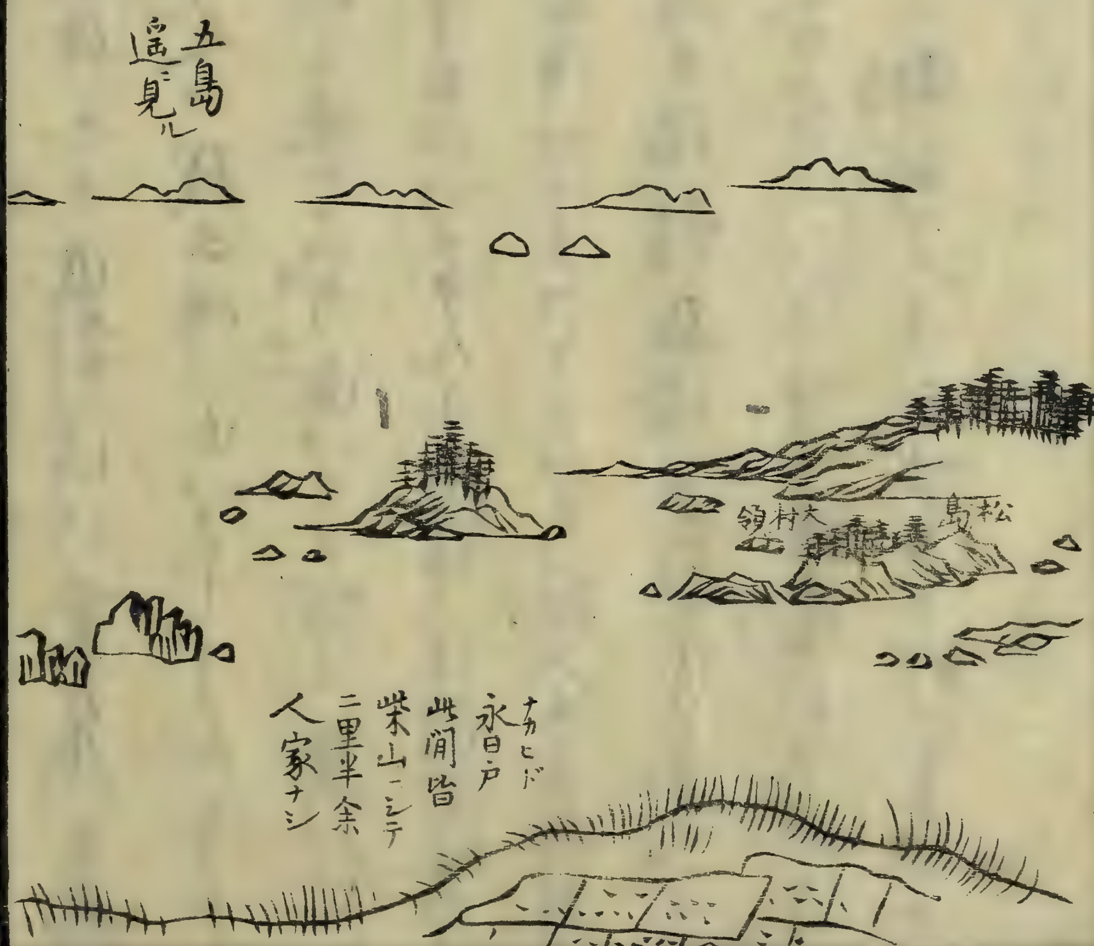

和蘭船之圖
万力車 長崎ニテハセビト云
ヲランダニテハカツトロルト云


錠（イカリ）
如圖
日本の錠も此ごとくにつくりたきもの
鉄
木

十月十二日長崎より七里西南の方脇津といふ所より戸町深堀なとゝ云所をも過て高き山をめぐり岩石を踏行事二里半余山の頂人家なし右の方遥に五島を見左なる方天草島又島原肥後の國見えて向所此國無日足ヨリ四十八里日本の絶地なり脇津人家百軒余此邊琉球芋を食とし風土暖地にして雪不降ザボン橙其外奇草をみる」廿八日朝五時より大波戸より舟にて稲佐悟真寺に支那人七十人余も集り居て船岸に近くを待て太鼓笛を吹寺まて送る其うち船長八人衣服繻子紗綾の類色々

黒シ余下人ハ鼠色木綿也大通辭清川榮左衛門下通
詞吉島左十郎支那人曰我ホ佛參いたしたれハ寺も
大破ニ及へり夫故砂糖三俵ヲ寄進いたすへし然れとも
住僧は身持不正ハ世間にいゝふらんと通辭住僧を呼出
し此旨をさとす老僧かしらをさけて恥入たる躰也
ハ程赤城貫精湖周壬禄程敬倫のまねかる卓子
盤四人ヲ席をさしはさむ余も共ニまじりて食ス又画者
描く人ハ姓名を尋する都の人と云ゆへなれハキンジン
キンジンしと呼たり

長崎より時津へ行路左右海をのぞむ其右乃方を圖海上小島多し




五島城下

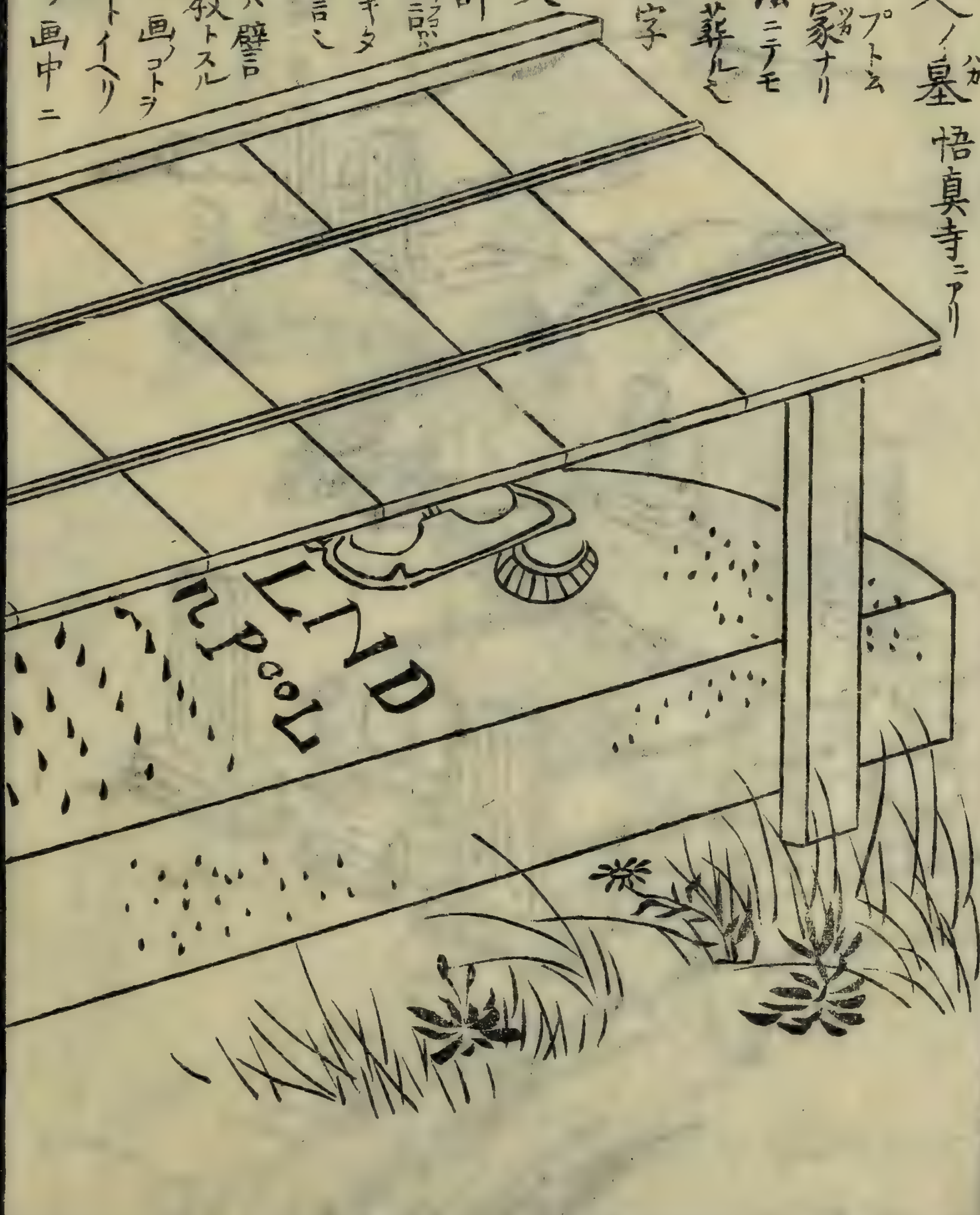

長崎ヨリ七里
西ノ方脇津
此所ニ三崎観音アリ
長崎ノ者多参詣ス
五島
遠見
脇津
芝山ニシテ木ナシ


肥後
椛島
観音堂

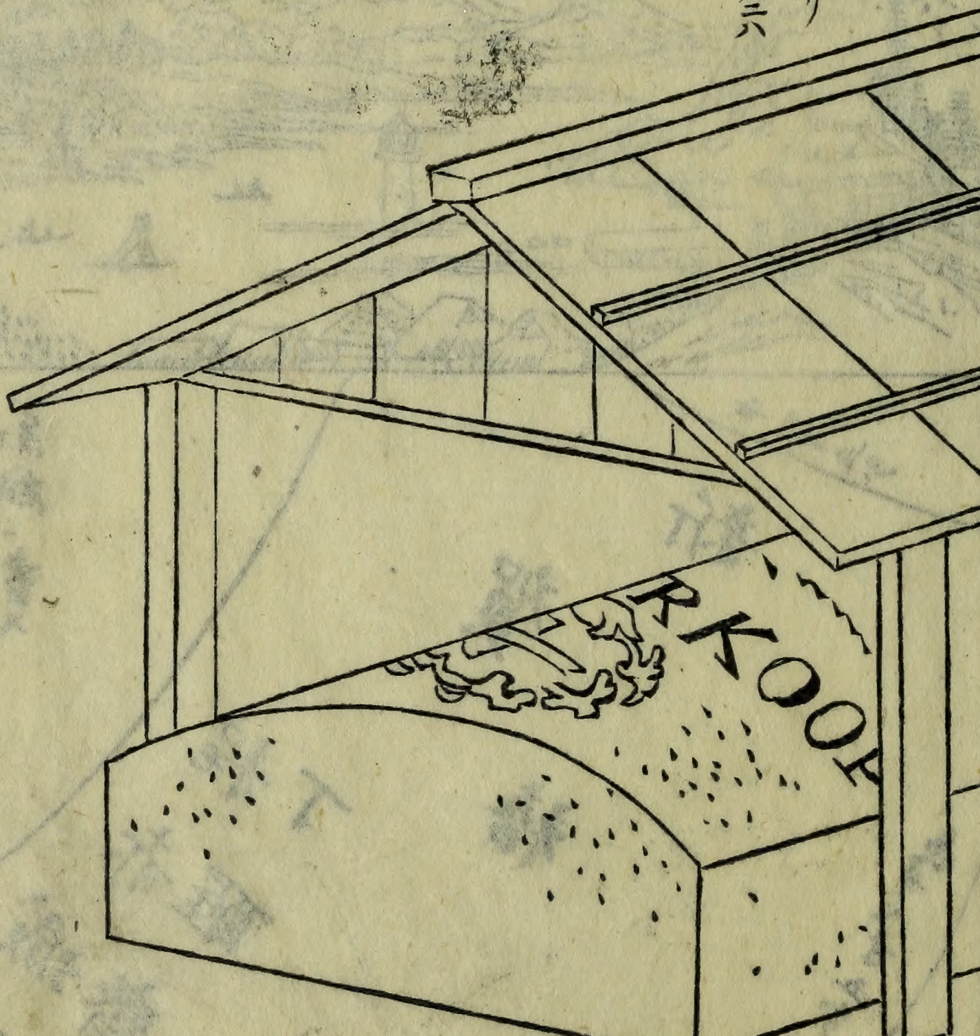

悟真寺支那人之墳墓
衣類財寶ヲ紙ニ描入ニ火中ニ


支那人ハ臥葬トテ臥タルマヽニテ葬ル

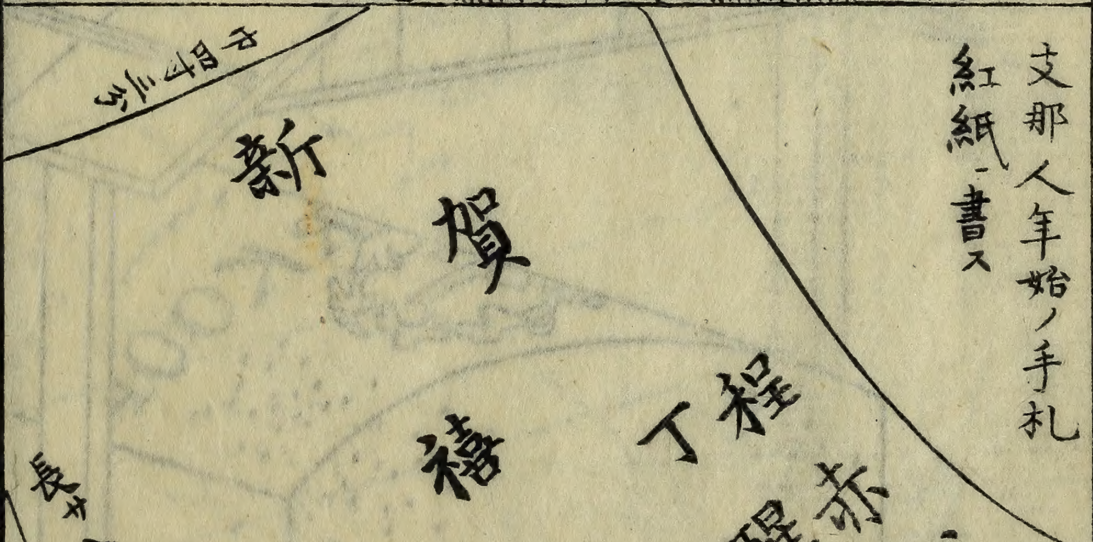
和蘭人ノ墓 悟真寺ニアリ
ヅウルコプトム
カピタンノ冢ナリ
彼國ノ法ニテモ
卧タルマヽ葬ルヽ
碑ニ文字
ヲ彫テ
金色ヲ入
上ニ時計
ヲキザム 詞ハ
漏剋ツキタ
ルト云譬言ト
波國ニテハ譬言
ヲ以テ教トスル
コト多シ 画ノコトヲ
則タトエトイヘリ
又彼國ノ画中ニ



両翼アル人物或ハ
異形ナル圖アリ皆
タトヘヲ画シタルモノナリ
カッテ羽ノアル人ノアルニハ
アラズ




十二月十四日長崎ヲ發シテ三里時津ヨリ平戸島ノ方ニ渡リ鯨ヲ見ル鯨ノ圖ヲアラハシメツラシキコトヲ話
稲佐辨天
浦上村


支那人年始ノ手札
紅紙ニ書ス
巾四寸三分
長サ八寸五分
新
賀
禧
程
丁
赤
醒
城
齋
恭

巻之三終